

フランス語が英語の形容詞の意味変化に与えた影響とその結果 －英語，ドイツ語，フランス語の比較言語史的考察－

三輪伸春

第1章 英語の外来語の多さ

§ 1. 基本語彙の中の外来語

ヨーロッパの言語の中でも英語には外来語が非常に多い。表1は英語の基本語彙1,000語から20,000語，140,000語の中にどれほどの外来語があるかを示したものである。

英語本来語は1000語では57%だが総語彙数を増すごとにその割合は減るのに反し，フランス語はラテン語を含めると20,000語では51%，140,000語では57%とその割合は増加する。他方，英語本来語は14.0%に減少する。従来フランス語・ラテン語からの借用語が多いとされる理由である。

表 1

	英語	Old Norse	LAT. & FR	Grk.	Sp. & It.	その他
1,000語	570(57.0%)	40(4.0%)	370(37.0%)			
20,000語	3,800(19.0%)	1,400(7.0%)	Lat.3,000(15.0%) Fr. 7,200(36.0%)	2,600(13.0%)	200(1.0%)	1,800(9.0%)
140,000語	19,600(14.0%)	2,800(2.0%)	Lat.50,400(36.0%) Fr. 29,400(21.0%)	6,300(4.5%)	4,200(3.0%)	27,300(19.5%)

§ 2. イギリス人の平均的な朝食のメニューに見る外来語

イギリス人の平均的な朝食のメニューを見ると以下のようなものがある。
grape-fruit (F), orange-juice (F), toast (F), marmalade (F), sugar (F),
lemon (F), bacon (F), butter (L), egg (Scand.), tea (Ch.); milk (Indo-European),

bread(IE)

つまり、古くインドーヨーロッパ祖語に由来しヨーロッパの多くの言語に共通する milk「牛乳」、bread「パン」は別としてその他の語はすべて外来語である。借用元言語ごとに分類する。

表 2

	個数	単語
印欧語（英語本来語）	2	milk, bread
ラテン語	1	butter
フランス語	7	grape-fruit, orange-juice, toast, marmalade, sugar lemon, bacon,
古北欧語	1	egg
中国語	1	tea

食事の名称も breakfast のみ英語で他はすべてフランス語である。lunch, luncheon, supper, feast, dinner, banquet.

§ 3. 基本1000語の中の外来語の例

形容詞

古スカンジナビア語：ugly, low, ill, weak, wrong, flat, loose, etc.

フランス語: beautiful, large, brave, just, honest, foolish, etc.

フランス語はいい意味を持つ語が多いようである。

名詞

古スカンジナビア語：【身体部位】 leg, skin, 【親族名称】 sister, husband, fellow.

フランス語：【身体部位】 face; 【親族名称】 family, parent, aunt, uncle, master, mistress, prince, princess, sister, 【他】 sir, gentleman, hour, minute, second, season.

これに対し英語本来語は,

英語：【身体部位】 arm, back, body, bone, ear, eye, finger, foot, hair, hand, head, knee, mouth, neck, nose, shoulder, tooth, heart, mind; 【親族名称】 brother, daughter, father, mother, son, child, man, wife, woman, girl (cf. boy), 【他】 king, queen, lady, friend, etc.

に見られるように、基本語中の基本語である身体部位を表す語は face 以外は英語本来語であり、親族名称にもフランス語は入り込んでいる。スカンジナビア語が身体部位に借用されているのは、英語と同じゲルマン語であるからであり、純粋な外来語とはいえないであろう。

イエスベルセンは、英語には外来語が多く、しかも基本語彙にも多いことを古スカンジナビア語からの借用語を使って巧みに表現している。

‘An Englishman cannot *thrive* or be *ill* or *die* without Scandinavian words; They are to the language what *bread* and *eggs* are to the daily fare.’

(O. Jespersen, *Growth and Structure of the English Language*, 1982¹⁰, p. 65 (南雲堂版))

では、英語とおなじゲルマン語に由来するドイツ語における外来語はどうであろうか。

§ 4. 英語とドイツ語における外来語の比較

同じゲルマン語に属しながら、英語とドイツ語では外来語の割合が顕著に違う。両言語にしめる外来語を比較するためにサッカレーの『虚栄の市』からの一節を引用する。

(M. シェーラー 『英語の語彙の歴史と構造』 pp.1-2, 南雲堂版, による)

Miss Sharp's father was an *artist*, and in that *quality* had given *lessons* of drawing at Miss Pinkerton's *school*. He was a clever man, a *pleasant companion*, a careless *student*, with a great *propensity* for running into *debt*, and a *partiality* for the *tavern*. When he was drunk he *used* to beat his wife and daughter: and the next to morning, with a headache, he would *rail* at the world for its *neglect* of his *genius*, and *abuse*, with a good deal of cleverness,

and sometimes with *perfect reason*, the *fools*, his brother *painters*. (W. Thackeray, *Vanity Fair*, 1847)

以上の英文では、個人名を除く総数91語のうち

外来語22語 (24%) (名詞17語, 形容詞 2語, 動詞 3語)。

本来語69語: 自立語21語 (23%), 機能語43語 (53%) (a/an 8回, the 4回, and 6回, he 4回)。

同じ語は1回と数えると総数60語。

外来語21語 (24%⇒35%)

本来語の自立語21語 (35%), 機能語18語 (30%)

となる。

これに対し、上の引用と同じ一節のドイツ語訳に占める外来語の割合は以下のようなになる。

*Miss Sharps Vater was Maler gewesen, und als solcher hatter er an Miss Pinkertons Institut Zeichenunterricht gegeben. Er war ein gescheiter Mann, ein angenehmer Gesellschafter und ein sorgloser Künstler mit starker Veranlagung zum Schuldenmachen und einer Vorliebe fürs Wirtshaus. Wenn er betrunken war, schlug er seine Frau und seine Tochter, und wenn er am nächsten Morgen mit Kopfweh erwachte, dann verhöhnnte er die Welt, weil sie seine Begabung nicht erkannte, und verpottete – mit viel Scharfsinn und manchmal auch mit gutem Recht – seine Dummköpfe von *Kollegen*.*

(*Jahrmarkt de Eitekeit*, tr. by Elizabeth Schnack)

英語の引用文と全く同じ一節 (総数85語) からなるにおけるドイツ語の外来語数はわずかに3語である。

総数85語; 外来語3語: Miss, Institute (=school), Kollge (=brother)

それでは、同じゲルマン語なのになぜ英語には外来語が多いのかを考えてみる。

第2章 英語史の区分

あらためて英語史を外来語を中心にまとめてみると以下のようになる。

表3 外来語を中心にした英語史

	英語史	年号	事件	接触した民族	接触した言語
1	前史	55-5年BC	J・シーザーイギリスの侵入	(ケルト人)	(ケルト語)
2	英語史	449年	アングロサクソン人の侵入(英語史の始まり)	ケルト人	ケルト語
3	古英語	787年	デーン人の侵攻	デーン人	スカンジナビア語(ON)
4	中英語	1066年 (1362年)	ノルマン・コンクエスト (英語, 公用語に復活)	ノルマン人 (⇔デーン人)	ノルマン・ フレンチ語
5	近代英語	1500- 1650年	ルネッサンス		フランス語 ラテン語, ギリシア語
6			近代科学の発展		
7			新世界への雄飛		未知の言語

この表でイギリス人、英語がどのようにして異民族、外来語に接してきたを概観することができる。この年表をドイツ語の歴史と比べてみると英語史において外来語の持つ意味がわかってくる。英語の国際語化との関連で考えてみる。

第3章 英語の国際語化への要因

§ 1. イギリス人の異民族・外国語との接し方

異民族との接触という視点から英語史を単純化して表にしてみる。接した民族名, 言語名, 生活習慣, 宗教という要素から比べてみる。

表4 (NF=ノルマン・フレンチ=ノルマン人のフランス語)

	民族	言語	生活習慣	宗教
2	ケルト人	×	×	×
3	デー人	◎	◎	◎
4	ノルマン人	○Gmc→NF	◎	◎
5, 6	中央フランス語	○NF→Fr	×	◎(キリスト教)
	(ラテン語)	○Fr→Lat	×	◎
	(ギリシャ語)	○Lat→Grk	×	◎
7	新大陸	×未知の言語	×	×

英語がブリテン島に移住後最初に接した外国語はすべての要素で異なるケルト語である。

次いで接した民族はすべての要素でほとんど同じデー人である。ノルマン人は、もとはと言えば同じゲルマン人であるが、一旦ノルマンディに定住した後に、フランス語化した後にイングランドにやってきた。その意味では、ゲルマン語の要素を残していた。そして中央フランス語、ラテン語、ギリシア語と続く。

ついで同じようにドイツ語の歴史を外来語との関連でみる。

ドイツ人の異民族・外国語との接し方を表にしてみる。

表5

	ドイツ語史・事件	民族	言語	生活習慣	宗教
2	前史	ケルト人	×	×	×
3	古ドイツ語	デー人	◎	◎	◎
4					
5,6	ルネッサンス	中央フランス語	×	×	◎
	近代科学	(ラテン語)	×	×	◎
		(ギリシャ語)	×	×	◎
7	新世界	新大陸	×	×	×

英語史と決定的に違うのは、ノルマン人との接触がないことである。ドイツ人とフランス語、ラテン語との関係についてブラッドリは「ドイツ人はイギリス人よりも熱心にフランス語、ラテン語と接した」と次のように述べている。

Germany and Holland have certainly not been less, but probably much more, devoted to classical scholarship than England has; but their language were not, in their middle stages, saturated with French loan-words, and consequently they were led to find expression for new ideas by development of their native resources, instead of drawing on the stores of the Latin vocabulary.

(古典文学の研究については、確かにドイツとオランダは英国に比べて優るとも劣らないであろう。しかし、ドイツ語とオランダ語はその発達過程において、フランス借用語をそれほど取り入れなかったので、新しい観念を表す必要に迫られたとき、その語をラテン語の宝庫から引き出すことをせず、本来語を操作して間に合わせたのである。)

(H. Bradley, *The Making of English*, 1904, 1968², 成美堂版p.77)

以上のことから、国際語化へ向かう英語と、いまだに古高地ドイツ語の姿をとどめるドイツ語との違いが見えてくる。

第4章 英語が外来語を容易に受け入れる理由

- 1) ブリテン島に移住した(表3の2)後は、ケルト語(表3の2)と接触する。河川名(Thames, Trent, Avon, Ouse, Wye); 山岳名(Barr, Torre); 人名(Allan, Joyce, Samson)
- 2) 西暦787年に初めてイギリスに襲来したデーン人(表3の3)の王グズルム(Guthrum)は、878年、アルフレッド大王と和解。ロンドンからチェスターをワトリング街道で結ぶ線の北東側をデーンロー(Danelaw = 「デーン人の法に従う地域」)。
- 3) 戦争し、国境まで設定したのであるが、デーン人はもともと同じゲルマン

人であり、アングロ・サクソン民族の大陸時代には、現在のデンマーク辺りで隣り同士の民族。従って、クヌート王（Cnut）のイングランド支配の頃から次第に融和。ヴァイキング（＝デーン人）は、アングロ・サクソン民族と、言語・風習・習慣・社会・文化・宗教が同じであったので融和。もともと同じ民族であったデーン人との出会いが、ブリテン島においてアングロ・サクソン民族が初めて出会った異民族であったことがその後のアングロ・サクソン民族とその言語である英語のその後の行く末に大きな影響を及ぼす。

- 4) 歴史上、デーン人の後にブリテン島に侵攻してきたのは、ノルマン人である（表3の4）。ノルマン（Norman<“North man”）人はブリテン島でアルフレッド王に撃退されて、現在のフランスのセーヌ川に入ったヴァイキングの大軍に端を発するのでやはりゲルマン人であり、フランス本土を、ロワール川、セーヌ川、メイン川を逆のぼり、パリ、ルーアン、バーユ等を襲った一派。西フランク王シャルル（「愚直王」）はロロ（Rollo）を頭領とする一派に、セーヌ川下流の肥沃で果実栽培に適した土地を領地として与えた＝ノルマンディー（“ノルマン人の土地”）公国。
- 5) ノルマン人は、1066年にエドワード王が没すると、イングランドは自分達の先祖であるクヌートが支配していた土地であると主張して、イングランドの王位継承権を主張し、ノルマンディ公ウイリアム（Duke William of Normandy）の指揮のもとにイングランドに攻め入り、1066年にイングランド南部のケント州ヘイスティング（Hastings）の戦いでイギリス軍に勝って、以後2世紀にわたってイギリスを支配した。ノルマンディに定住しすぐにフランス語を話すようになった。従って、ノルマン人は北方のゲルマン人としてではなく、フランス人としてイギリスにわたってきた。もともとは北方のゲルマン人でありながら、フランスの言語、文化、宗教（キリスト教）を身につけたノルマン人が、生粋のゲルマン人であるデーン人の次にやってきたことは、英語の歴史に大きな意味をもつ。というのは、まず最初にやってきた“異民族”が生粋のゲルマン人、即ちアングロ・サクソン民族と全く同じ民族であるデーン人であり、次にやってきたのがもともとゲルマン民族であ

りながら、文化、宗教（キリスト教）、言語をフランス化したノルマン人がやってきた。イギリス人にしてみれば、いきなり、まったく未知の異民族がやってきた場合に比べれば、デーン人、次いで、ノルマン人という順序は、異民族に徐々に慣らされてゆくという結果を生み出し後世、イギリス人が世界中の色々な異民族と違和感なく接するようになった素地を作った。

6) 特に重要なことは、もともとゲルマン人であったノルマン人がフランス語（正確には、フランス語のノルマンディ方言=NF）を話していたということである。すでにノルマン・フランチによってフランス語に慣らされていたアングロ・サクソン民族にはパリのフランス語（Central French）に抵抗なく融和（表3の5、6）。

7) フランス語を通じて必然的にラテン語がイギリスに多量にもたらされた。ラテン語によるローマの古典がイギリスにもたらされた時、英語にとってラテン語はまるで未知の言語ではなかった。というのは、フランス語はラテン語の直接の末えいであり、ノルマンフレンチ、次いで中央フランス語にすでに十分なじんんでいたアングロ・サクソン民族にとってラテン語は全く未知の言語というわけではなかった。従って、ローマ古典がイギリスにもたらされるとラテン語は抵抗なく英語に取り入れられてしまった。

次に接触したギリシャ語はラテン語とは、文化面、特に哲学、文学に関する影響が大きく、先にラテン語に接していたイギリス人にとってギリシャ語はもはやまったく未知の言語ではなかった。従って、ヨーロッパの中でイギリスからもっとも遠隔の地にあったギリシャ語も比較的容易に英語に吸収された。

8) 結局、英語はおよそ外国語というものへの違和感を消失。

従って、エリザベス朝以降イギリスが海外に雄飛して、ヨーロッパ世界とはまるで異なる、アメリカ新世界、アフリカ、アジア、オセアニア、から旧世界にはなかった事物・概念とそれを表す外国語がもたらされてもそれ程抵抗なく、ことごとく受け入れた（表3の7）。

以上のことが、同じゲルマン語でありながらドイツ語には外来語が少なく、英語には甚だしく外来語が多い原因である。世界中のいかなる言語とも融和できる英語の性格はこのようにして形成された。これがひいては英語が国際補助語として受け入れられる要因である。

(三輪『英語史への試み』第三部、『英語の辞書史と語彙史』近刊参照)

以下の表は19世紀半ばから英語がその勢力を伸ばしてきた状況を示している。

表6 世界語としての英語 (100万人単位)

	英語	ドイツ語	スペイン語	フランス語	ロシア語
1868年	60	52	40	45	45
1890年	111	75	42	51	75
1900年	116	75	44	45	106
1912年	150	90	52	47	106
1921年	170	87.5	65	45	12.5
1962年	250	100	140	65	130

(モセ『英語史概説』郡司・岡田訳, pp.239-40) (1962年は*Life*誌による)

第5章 そのほかの要因

§ 1. 英語の柔軟性

Sithen the sege and the assault watz sessed at Troye

The bor3 brittend and brent to brondez and askez.

(トロイが包囲と攻撃が終わったとき、要塞が粉碎されて炭と灰に化したとき。)

(*Sir Gawain and the Green Knight*, 冒頭)

「とりわけ13世紀と14世紀とにフラン語からの借用語が、ノルマン語、フランスシャン語、プロヴァンス語たるを問わずおびただしく流れ込み、ゲルマンとの語彙と入りまじった。この時から英語は混交の語彙を持つという特徴を、

きわめて典型的な特徴として身につけ、以後もそれを保持することになった。*Sir Gawain and the Green Knight* の最初の 2 行の詩が (多くの例のうちでも) 明白な実例を提供している。第一行では文法を示すのではないすべての語がフランス語系で、第 2 行ではそれがみなゲルマン語形である。」

(モセ, 『英語史概説』郡司・岡田訳, p.85)

英語は外来語を本来語と違和感なく柔軟に取り入れた文体を作り上げた。このような現象も英語の外来語に対する柔軟な姿勢に起因する。

§ 2. 英語の卓抜な語形成能力

1. 混種語 (hybrid)

Gentle(1225) ⇒ gentlewoman(1230), gentleman(1275), gentleness(1300),
gently(1330), etc.

False((1200) ⇒ falseship(1230), falser(1340), falsedom(1297), etc.

2. 機能転換 (Functional Shift) (三輪『シェイクスピアの文法と語彙』第12章) Take a walk. It's a must.

3. 派生 (Derivation)

Mutin(F) mutine(v), mutine(v), mutinous, mutinously, mutinousness,
mutiny(n), mutiny(v), mutineer(n), mutineer(v), mutinize(v).

これらの現象も、外来語をも柔軟に取り込む英語の自由闊達な語形成能力を示している。

第 6 章 フランス語の影響の大きさ

§ 1. 文法 (進行形, 関係代名詞, of など)

§ 2. 発音 (oi, oy など) (三輪『英語史への試み』第2部-4)

§ 3. 語彙借用から意味変化への介入

Danger, cheer, devise; nice, catch, (『英語の語彙史』); carry (『シェイクスピアの文法と語彙』)

【§ 1 ~ § 3 は本稿では省略】

§ 4. 形容詞の多義化から文法化へ : fair, fine (三輪『英語の辞書史と語彙史』第12章)

英語の文法へのフランス語の影響はよく知られている。発音の場合も、フランス語の二重母音 oi, oy [oi] をそのまま借用している。異音であった v, z を音素として確立するのにもフランス語の影響である (三輪『英語史への試み』)。

従来、フランス語の単語が多数借用されたということはよくいわれることであるが、フランス語が英語の単語の意味変化にも影響を与えた、というよりむしろ介入していることはあまり知られていない。

以下に、フランス語の単語の意味変化と英語の単語の意味変化を比べて、フランス語が英語の単語の意味変化に与えた影響を考察する。さらには、英語本来語の意味変化に与えたフランス語の影響について考えてみる。

第1図 fine (OEO にもとづく)

700-1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900

I. Finished, consummate in quality

1. Of superior quality, 1250 _____

2. (a. of metal; b. of gold or silver; pure, refined, of liquids)
1300 _____

5. (Of persons) skillful
1320 _____

II. Delicate, subtle

6b. Of immaterial things: delicately, beautiful.
13?? _____

7. Delicate in structure or structure
1386 _____

8. Of a tool: sharp

1400 _____ 1622

10. a. (Of distinctions) delicate, refined

1567 _____

III. Senses developed in English (chiefly =Fr. *beau*)

12. admirable in quality

1440 _____

13. (Of persons & things) handsome

1340 _____

14. Of handsome size

1590 _____

14. b. (Colloquially) very large; also followed by *large*, *big*, etc.

1833 _____

15. Of weather: Free from rain

1704 _____

16. Of dress: Highly showy

1526 _____

- 1) *fine* は借用されて以来、フランス語の時代にすでにあった古い意味を廃用することなく維持した上に、
- 2) さまざまな意味を発達させたために非常に多義な語となった。
- 3) *Fine* の意味変化にみられる第一の特徴は、使われる文脈が明確に区別されていて意味が曖昧になることはまずないと思われることである。
- 4) 第2に、OEDも明記しているように、借用もとのフランス語 *fin* のみならず、意義Ⅲ12-16はフランス語 *beau* の意味まで借用している(以下参照)。
- 5) 第3に、*sad*, *silly*, *nice*, と同様に反対の意味まで生じている。
- 6) 多義語は具体的に使用される場合には個々の話者ばかりでなく、言語集団全体に明確な使用上の制約が共有されており曖昧さを生じない傾向にあるよ

うである。

§ 5. 意味の多義化から文法化へ : fair

第2図 fairの意味変化 (Menner, p.68. 語義の右のカッコ内には OED の語義番号)

700-1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900

1. beautiful (I.1)

2. light as opposed to dark (II.6)

1551 _____

3. free from blemish, pure (III.7,8,9)

1175 _____

(1858-in phrases)

4. favorable, benign (IV)

1205 _____

5. free from bias, equitable (III.10)

1340 _____

6. pretty good, passable (III.11)

1860 _____

1) fairにはそれぞれ異なった時期に生じ、現在も用いられている6種類の意義がある。

2) しかし、複数の意味が平行して用いられていても不都合は生じていないことがわかる。古くからある意味にはかなりの使用上の条件があるからである。例えば、I「美しい」は現在では詩ときわめて華やかな文体にのみ用いられる。IIの light-haired (金髪の) は blond に置き換えられつつある。IIIは、fair copy, fair fame という成句に限られ、果物、白紙、水については用いられない。IVは天候についてのみ用いられる。現代では、中英語に始まる III.10 equitable, just (公平な, 正当な) と19世紀半ばに始まる III. 11の passable (まずまず

の、並の) が一般的といえる。いずれにしても使われる文脈を厳密に点検すれば fair の用法はかなり明確に分類されていて、実際に使われた場面で曖昧さを生じる可能性は少ないといえよう。

3) 多義語の古い意味とそれとはかけ離れた新しい意味とは時期をずらせる傾向があるが、fair にみられるように古い意味と新しい意味とが平行して用いられても具体的な使用にはそれぞれ制限・区別があって曖昧さを生じることはないといえよう。

4) fair の意味変化から、一見多義の語もうまく使い分けられ、曖昧さが生じないようになっていることがわかる。

第6章. 文法化の歴史的原因：英語，フランス語，ドイツ語の比較言語史的考察

形容詞の意味は多義化は意味の分析的傾向と考えることができる。というのは、fair にみるように、単語が特定の意味から抽象度を高めて、具体的に使用される場面での文脈（どのような名詞を修飾するか）、用法（どのような語と成句をなすか）によって意味が決定されるからである。この傾向はフランス語に特有の傾向である。例えば、現代フランス語の beau は英語の fair と同じく多彩な意味を持つ。

第3図 現代フランス語 beau の意味

1. (男女について) 美男子の、美女の
2. (知的、芸術的に) 優れた
3. (精神的に) 高貴な
4. (卑近な意味で) 見事な、belle salade 立派なサラダ菜
5. (社会的に) 優れた
6. (天気・気候が) よい
7. (過去の事柄について) 幸福な

8. (礼儀が) 正しい

9. (数・量が)多い, (恰幅のいい) 男女 [皮肉]

(『仏和大辞典』白水社, 1981)

それぞれの意味は使われる場面・文脈によって決定されている。また、9の意味は1からの比喩・皮肉から生じた意味で、fine とよく似た発展である（美しい→大きい）。

意味の多義化はフランス語の影響と考えられる。単に語彙を多数借用したという表層面にとどまらず、英語の語彙構造の中核にまでその影響は及んでいる。すなわち、英語の文法組織の単純化、屈折活用の水平化に広く深い影響を与えたことは周知に事実である。従って、フランス語の語彙の分析的特性が英語の語彙変化にも影響を与えたとしても不思議ではない。フランス語は各単語の抽象度が高く、表現は分析的に行われる。この点でドイツ語とは異なる性格を持つ。英語はドイツ語と同じゲルマン語であり、古英語の時代にはまだ総合的であったが、度重なる異民族との接触により英語は中間言語 (interlanguage) 化して分析化が進んだ。この点は、先住民族、ケルト民族、ラテン民族、ゲルマン民族と融合し、中間言語化し、分析化が進み、さらには抽象化へと推移したフランス語とよく似ている。フランス語は英語と並んでほかのヨーロッパ諸言語にぬきんでて分析的言語なのである。分析的傾向はやがて抽象化に向かう。(ドーザ, 1982, pp. 420—23)。

名詞を例に挙げると、英語の the big stone はそのままドイツ語には翻訳できない。The big stone は抽象的で何格であるのか明示されていない。主語、目的語、補語のいずれにもなる。ところが、ドイツ語では、主語であれば der gross-e Stein という形態しかありえない。den grosse-en Stein であれば対格でしかありえない。dem grosse-en Stein (e) は与格である。Des grosse-en Stein-s は属格である。いずれの格も特定の形態を持ち一般的抽象的に表現する手段がない。(ドーザ, 『特質』, p.423, 泉井, pp.10-11)。英語はノルマン征服以後著しく分析的傾向を強めてきたが、フランス語には及ばず、まだ具体的などこ

ろがあつて、to put と to place とを区別する。また、ドイツ語と同じ区別がある (to set, to lay ; G. setzen, legen)。フランス語では、動きを表すものはもうこれ以上なくなつては理解に支障をきたすところまで来ている。ドイツ語は、setzen 「立たせておく」と legen 「寝かせておく」を別々の語で表すがフランス語では同じ語を用いる (F. placer, placer couche)。

一般的に、英語の文法にみられる分析的傾向はフランス語の影響と考えることがいえるのであれば意味変化における分析的傾向・抽象化もフランス語の影響と考えることができるのではないか。英語が度重なる異民族との接触で中間言語的性格を帯びようになり文法組織が単純化され分析化がすすんだことが共通の素地としてあり、このことが英語の文法面と同じく語彙・意味の分野にも分析的・抽象化傾向を助長させたと考えられる。

これに反して、ドイツ語は古期高地ドイツ語の時代から複雑な屈折を保存した結果総合的な性格を堅持している。例えば、主格、対格、与格がまったく同じ形態をとる、無格的、抽象的な英語の the big stone はドイツ語に翻訳することができない。ドイツ語の der gross-e Stein は排他的に主格であり、通格的な the big stone とは違う。gross-e という形容詞と定冠詞 der によって主格であることが明瞭に示されている。対格の den gross-en Stein, 与格の dem grosse-en Stein(e), 属格の des grosse-en Stein-s も同じことが言える。古い文法を堅持していることがドイツ語の国際語化を妨げている。英語の場合、互いに不慣れな言語を持つ異民族との接触により中間言語化して、語尾屈折の代わりに前置詞と語順にたよるようになった。フランス語 d'un chapeau gris とドイツ語の eines grauen Huts を比べると、ドイツ語では、個々の単語がそれぞれ独立して存在し全体としてはフランス語ほど緊密ではない。ところが、フランス語の場合、個々の語は独立していなくて互いに依存しあつて全体で始めてまとまった意味をなしている。その意味では全体に抽象度が高い。フランス語は分析的傾向からさらには抽象的傾向へと推移してきた。英語はノルマン征服以降そのようなフランス語の分析的・抽象的傾向への影響を受けてきたために語彙の意味も抽象度を高め、特定の文脈、特定の修飾語との関係におかれて始め

て具体的な意味を持つという傾向を強めてきた。そのもっとも典型的な形容詞の例が *fair* である。*Fair* は抽象化して、*fair* 自体はこれという意味を持たず、具体的な文脈を与えられて始めて意味をなす。これが英語の国際語化の要因である。

(本稿は、2010年11月11日に神奈川大学で行った講演を活字化して加筆したものである。講演の機会を与えてくださった水野光晴先生にはこの場を借りて感謝します)

参考文献

- H, Bradley, *The Making of English*, 1904, 1968², Macmillan, (成美堂).
- O. Jespersen, *Growth and Structure of the English Language*, Macmillan, 1938, 1982¹⁰. (南雲堂)
- 三輪伸春, 『英語史への試み』1987, こびあん書房
- 三輪伸春 『英語の語彙史』1955, 南雲堂
- 三輪伸春 『シェイクスピアの文法と語彙』2005, 松柏社
- 三輪伸春 『英語の辞書史と語彙史』松柏社, 2011.